

〔本草和名^{十七}〕椎子、又有櫪子、相似而大於椎、出崔禹和名之比、

〔倭名類聚抄^{十七}〕椎子、本草云、椎子、上音直、追反、和名之比、

〔箋注倭名類聚抄^九〕原書不載椎子、本草和名載椎子、云出崔禹、蓋源君誤引、按閩書南產志云、椎

科子也、曾師建記作錐、謂之末銳於錐、此擬其形似錐、末言宋志以錐作椎、蓋從木也、則知椎子之椎、

從木、從錐省、後世會意字、其音當與錐同、職追反、與柸、檍之椎音直進反、其字不同、此所音誤、○中和

名依輔仁、神武紀云、椎此云辭毘、欽明紀椎子、萬葉集椎皆同訓、新撰字鏡作榘、榘亦並同訓、

〔伊呂波字類抄^志〕椎^シヒ^ノミ^ミ、椎子^{見本艸}

〔和字正濫抄^二〕ひ

椎 玄ひ、日本紀、古事記、萬葉、和名一同なり、玄ひとかくは誤なり、兼輔卿家集にも、十干を隱題に、よまれたる中に、丙^{ヒノ}を玄ひのえはと隱されたり、古事記に、應神天皇の御歌には、玄ひひとよませたまへり、

〔和字正濫要略〕椎 玄ひ、和名に之比、日本紀に椎此云辭毗、古事記宣化天皇段に、火穗王者、志比

陀君之祖といへるを、日本紀には椎田とあり、又古事記應神天皇の御歌に、志比比斯那須伊知比

韋能、これ椎のごとくなる櫛とつゞけさせ給へるなり、志比比とは、久比を、倭建尊の久毗比とよ

ませ給へるがごとし、古語なるべし、那須とは、如五月蠅を日本紀にさばへなすとよめるなすに

同じ、萬葉第十四に、四比乃故夜提、又思比乃佐要太延喜式第七大嘗會式云、柱將椎枝^{古語所謂志比乃和惠}

兼輔卿家集に、十干を隱題に、よまれたる中に、ひのえをよめる歌、はし鷹のとがへる山の玄ひの

えはときはに、かれぬ中を頼まん、又、上の香椎の宮をさまぐ、に書る眞名假名たがひに、證據也、

俗に、玄ひとのみ書きなれ、俗書にこれを執する故に、見及ぶに、まかせて、玄げきをいとはず、證を引也、見む人心あるべし、